

# 令和7年度保育サポーター研修会

と き 令和8年3月8日(日) 10:00～

ところ 山口県医師会6階 会議室

子育て中の医師が安心して働き続けられるよう支援するため、育児サポートを行う保育サポーターを対象とした研修会を開催した。第15回となる今回は、県内各地から17名のサポーターが参加された。開催日が偶然にも国際女性デー(3月8日)と重なり、和やかな雰囲気の中で研修が行われた。

## 保育サポーターバンクの現状説明

山口県医師会男女共同参画部会長・

保育サポーターバンク運営委員長 戒能 美雪

制度開始(平成21年9月)から現在までの活動状況について報告を行った。これまでに延べ159件のサポートが行われ、多くの若手医師が仕事を続ける上で大きな助けとなっていることを紹介した。サポーターの皆さまへの感謝の言葉も述べた。また話題提供として、医療現場で課題となっている「医師の偏在(地域偏在・診療科偏在)」について説明し、今後も県内医療を支える医師の育児サポートを継続していただきたい旨を伝えた。

[報告:男女共同参画部会長 戒能 美雪]

## 講演

### 何が正しい?アトピー性皮膚炎のこと

山口大学大学院医学系研究科

皮膚科学講座助教 下村 尚子

本研修会は、医師家庭における子育てとキャリアの両立を支援する保育サポーターを対象として開催されたものである。今年度は、山口大学皮膚科学講座助教の下村尚子先生をお招きして講演いただいた。講演の冒頭では、新潟出身である先生のご実家の軒先を覆うほどの積雪の写真が紹介され、雪国・米どころ・酒どころという穏やかなイメージを一変させる印象的な導入となった。

アトピー性皮膚炎(AD)とは、増悪・寛解を

繰り返し、掻痒のある湿疹を主病変とする疾患である。この疾患の有症率は、1歳の時点で4.0%とされているが、先生の臨床的実感ではこの数倍にのぼるとのことであった。赤ちゃんがタオルや寝具で顔をこする行為は、「かゆみ」のサインである可能性があることなど、日常の観察に直結する示唆も示された。

講演では、ADの症状や特徴に始まり、薬物治療、とりわけステロイド外用薬の適切な使用方法や副作用、新規治療薬について、さらに日常のスキンケア、生活上の悪化因子への対策、入浴や発汗への対応まで、体系的かつ分かりやすく解説がなされた。参加者は聞きながら熱心にメモを取り、終始高い集中力で聴講していた。特に、民間療法への向き合い方や、ステロイドに対する過度な不安については、会場から多くの質問が寄せられた。

ADの治療が遅れると、重症化や他のアレルギー疾患の発症につながる可能性があり、重症化は成長・発達への悪影響や合併症のリスクを高める。そのため、「早期介入」と「重症化予防」が極めて重要であり、医療者が正しい情報を分かりやすく伝えることの意義が強調された。

またAD治療のゴールは「症状がない、もしくはあっても軽微で、日常生活に支障のない状態である」と示された。患者にとって「先が見えない」ことは大きな心理的負担となるため、医師が明確な治療目標を提示することが、治療への理解とアドヒアランスの向上につながるという指摘は、私自身にとっても学びの多い内容の一つであった。

講演後には、参加者のほぼ全員から、ADを自身の生活に引き寄せて考えた詳細なアンケート回答が寄せられた。本講演で得られた知識が、今後、家族や周囲の人々へと共有され、正しい理解の広がりにつながることを期待される。

[報告:常任理事 長谷川奈津江]